

# JAPAN PRIZE NEWS

1988年7月 No.5



## 日仏米豪の6博士に1988年『日本国際賞』

高速増殖炉、天然痘、エイズの研究で



ジョルジュ・バンドリエス博士  
〈エネルギー技術分野：  
高速増殖炉の実用技術の確立〉

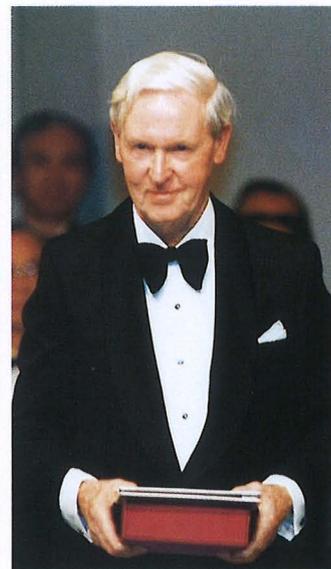


ドナルド・A・ヘンダーソン博士  
〈予防医学分野：天然痘の根絶〉



蟻田 功博士

〈予防医学分野：天然痘の根絶〉



フランク・フェナー博士

(財)国際科学技術団が、世界の科学技術の進歩に寄与し、人類の繁栄と平和に貢献した人々に贈る1988年(第4回)『日本国際賞』の授賞式が、お濠の桜も見ごろの4月7日、東京・国立劇場で行われました。

今年度の授賞対象分野は「エネルギー技術」と「予防医学」の2つ。両分野合わせて世界各国より406件の推薦があり、初の日本人を含む6博士が受賞しました。

「エネルギー技術」では、高速増殖炉の実用技術を確立したジョルジュ・バンドリエス博士(仏)が受賞しました。「予防医学」は2つのテーマが対象に選ばれ、天然痘の根絶を成し遂げたドナルド・A・ヘンダーソン博士(米)、蟻田功博士(日本)、フランク・フェナー博士(豪)が共同受賞、また、エイズ原因ウイルスの発見と診断法の開発で目覚ましい業績をあげたリュック・モンタニエ博士(仏)、ロバート・C・ギャロ博士(米)も晴れの受賞となりました。



リュック・モンタニエ博士

〈予防医学分野：エイズ原因ウイルスの発見と診断法の開発〉



ロバート・C・ギャロ博士

## 皇太子同妃両殿下ご臨席のもと 東京・国立劇場で厳かに授賞式

授賞式には、皇太子同妃両殿下のご臨席を賜り、矢口洪一最高裁判所長官をはじめ、在日外国大公使、科学アタッシェ、著名な学者・研究者、政界、官界、財界ならびに言論界代表ら約 800名の出席を得ました。

式典は、東京交響楽団の演奏するヘンデル作曲“水上の音楽”で厳かに開幕。受賞者が夫人を伴って登壇、財団の横田喜三郎理事長の挨拶、審査委員会（向坊隆委員長）による授賞理由の説明に引続き、日本国際賞の賞状、賞牌および副賞の賞金5,000万円（各分野ごと）が横田理事長よりそれぞれの博士に手渡されました。

そのたびに会場に大きな拍手が湧き起こり、詰めかけた内外報道陣よりカメラのシャッターが一斉に切られ、フラッシュ・ライトが交錯……。緊張の中にも受賞の喜びを満面に表わした受賞者たちの晴れやかな姿が印象的でした。



### 皇太子殿下のお言葉(抜粋)

今回受賞された6博士の関係する分野を始め、科学技術は現在日進月歩の勢いで発展しております。その成果を社会のすべての人々の幸福に結び付けるよう私どもは努めていかなければなりません。

この度の受賞が今後の科学技術の一層の発展に貢献することを願い、お祝いの言葉といたします。

日本人として初受賞となった蟻田功博士は、日本国際賞のビッグニュース。今年2月の受賞者発表以来、マスコミの取材攻勢を浴びていた先生ですが、「予防医学での受賞に大きな意義を感じています。今後は世界ポリオ根絶計画を時間が許す限り手伝っていきたい」と早くも次の目標に取り組んでおられます。



### 受賞者記者会見(4/5)

受賞6氏は、日本プレスセンターでの合同記者会見に臨みました。エイズ研究の両権威が顔を揃えたとあって、モンタニエ、ギャロ両博士はマスコミから質問攻め。



### 都知事表敬(4/6)

夫人を伴った6博士は、鈴木都知事を表敬訪問。短い時間でしたが、日本の首都・東京を預る都知事と科学者との懇談には、終始真摯なものがありました。



# 各界名士数百名を招き華やかな祝宴

記念講演会など“日本国際賞週間”に多彩な行事

4月7日夕方より、東京・赤坂プリンスホテルにおいて各界名士数百名を招き、華やかで国際色あふれる祝宴が開かれました。皇太子同妃両殿下をはじめ、矢口最高裁判所長官、伊藤科学技術庁長官、中島文部大臣らも顔を揃え、受賞6氏を祝福しました。

両殿下が向い合ってメインテーブル中央にご着席、さらにその周りに70名の各界名士がずらりと席を構える華麗なバンケット。

ハーブの演奏、歌の独唱などもあり、なごやかな雰囲気の中にディナーが進み、頃合いを見計って受賞6氏の業績と夫人の紹介が行われました。皇太子殿下のご発声により、受賞者の功績を称える乾杯が行われ、次いで三権を代表して矢口最高裁判所長官、また日本国際賞を後援している総理府、科学技術庁、外務省、文部省を代表して伊藤科学技術庁長官がそれぞれに挨拶と乾杯

を行い、鈴木俊一東京都知事、ピエール・ネルソン・コフィー在日外交団代表(象牙海岸共和国)からも祝辞を受けました。

最後にバンドリエス博士が受賞者を代表して謝辞を述べ、その中で、翌4月8日が花まつりの日であったことから、「とこしえの 平和の祈り 花祭り」と日本語で一句披露、会場の喝采を受けました。2時間にわたる祝宴は、受賞者をはじめ出席者全員に大きな余韻を残して無事終宴となりました。

授賞式前後の1週間が“日本国際賞週間”。受賞者は天皇陛下拝謁の栄誉をうけたほか、東京、大阪での記念講演会ならびに学術懇談会に出席、また日本学術会議訪問など多忙なスケジュールをこなしました。



## 記念講演会(4/6・8)

東京・朝日ホールと大阪・MIDシアターで記念講演会。一線級の科学技術者、研究者に加え、関心を持つ一般参加者ら延べ1,000余名が両会場に詰めかけました。



## 京都で休息(4/9)

多忙な公式行事のあい間をぬって、憧がれの古都・京都を訪れた一行。さくら咲く静かな庭園での野点に招かれ、和服姿の女性の優雅なお手前に日本情緒を満喫。



## 受賞者の声

「私と祖国にとって大なる荣誉です。日本は伝統文化のルーツとの緊密な接触を保ちながら、科学技術分野で非常に高度な発展を遂げている国で、その日本で素晴らしい賞をいただいたことを誇りに思っています」  
G. バンドリエス博士(仏)

「私たちの受賞は、天然痘根絶という最終目標達成のため、非常に困難な条件のもとで努力を続けてきた世界中の公衆衛生関係者にとっても、大きな喜びとなりました」  
D. ヘンダーソン博士(米)

「戦争による天然痘の流行の再燃、猿痘そう問題など根絶計画には数限りない苦勞がありましただけに、喜びもひとしおです。今回の受賞は、今後の日本の国際協力面での貢献努力を、大きく力づけるものになりました」  
蟻田 功博士(日)

「予防医学における歴史上最大の成果である天然痘根絶が日本国際賞というかたちで認められたことを大変喜んでます。ヘンダーソン、蟻田両博士とともにこの成果のために力を合わせた一人として認められたことを光榮に感じています」  
F. フェナー博士(豪)

「この荣誉は私一人のものではなく、エイズウイルスの発見と解明という冒険に参加された同僚、協力者全員に与えられたものと考えます。特にギャロ博士とこの荣誉を分かち合えたことは私の喜びです」  
L. モンタニエ博士(仏)

「私の研究には日本の科学者の皆さんの多大な支援と協力を頂いています。科学分野の先端をいく日本での受賞は、日本を愛する私にとって生涯忘れ得ない出来事となりました」  
R. ギャロ博士(米)

## ジャパン・プライズ 日本国際賞とは

日本国際賞は、世界の科学技術者を対象に、科学技術の分野において独創的、飛躍的な成果をあげ、科学技術の進歩に大きく寄与し、人類の繁栄と平和に著しく貢献したと認められた人に与えられる賞です。



『日本国際賞』賞牌

毎年2つの分野が選定され、各国からの推薦に基づき財団の審査委員会で受賞者を決定します。受賞者には、日本国際賞として賞状、賞牌、および賞金5,000万円(1分野につき)が贈られます。4月の授賞式と祝宴は、皇太子同妃両殿下のご臨席のもとに、各界名士千数百名が出席して盛大に行われます。

同賞は今年で第4回目を迎えましたが、過去3回の受賞者は次のようになっています。

### ●1985年

「情報・通信」ジョン・R・ピアース博士(米)

「バイオテクノロジー」

E・カチャルスキー・カツィール博士(イスラエル)

### ●1986年

「材料工学」デビット・ターンブル博士(米)

「医療技術」ウィレム・J・コルフ博士(米)

### ●1987年

「生物改良」ヘンリー・M・ビーチェル博士(米)

グルデブ・S・クッシュ博士(印)

「エレクトロオプテックス」

セオドア・H・メイマン博士(米)

## 1989年『日本国際賞』受賞者審査始まる

1989年(第5回)「日本国際賞」の対象分野は、「環境科学技術」と「医薬科学」の2分野で、すでに受賞者の審査が始まっています。これまでは、独立した科学技術分野がその対象となっていました。来年度は人々の日常生活に関り合いの深い総合的科学技術分野にスポットが当てられました。

### ●「医薬科学」分野

サルファ剤の応用や抗生物質の発見以来、発展のめざましい「医薬科学」の分野は、平均寿命の延長にも大きな貢献をしています。今や疾患のメカニズムは分子レベルから解明されようとし、理論的ドラッグデザインも始められました。

しかしなお、癌、難病、老化などの重要な課題が山積しています。人類の健康と福祉のため、医薬創製の基礎研究分野である医薬科学の使命は重大です。ここでいう「医薬科学」とは、生態機能物質の発見や全く新しい生理活性物質の化学合成をはじめ、化学、薬学の領域での新しい医薬創製等を対象としています。

### ●「環境科学技術」分野

よりよい環境で生活することを全ての人が望んでいるにも関わらず、世界人口の増加や急激な工業化による環境劣化に悩む人が増えていることから、環境に関する科学と技術の重要性に対する認識が高まっています。

「環境科学技術」とは、人間を取り巻く

環境に関するすべての科学と技術を意味し、生態学をはじめ、自然保護、自然改造、森林保全、砂漠緑化、都市環境、環境汚染物質、公害防止などに関する研究と応用を含みます。また、二酸化炭素、フロンガス、放射能物質の放出など、人間の行動が地球的環境に及ぼす影響の研究も含んでいます。

財団法人 国際科学技術財団

THE SCIENCE AND TECHNOLOGY FOUNDATION OF JAPAN (JSTF)

〒100 東京都千代田区日比谷公園1番3号 (市政会館) 電話/(03)508-7691(代)